

【旧約聖書日課】アモス書 7章10～15節

<sup>10</sup>ベテルの祭司アマツヤは、イスラエルの王ヤロブアムに人を遣わして言った。「イスラエルの家の真ん中で、アモスがあなたに背きました。この国は彼のすべての言葉に耐えられません。」

<sup>11</sup>アモスはこう言っています。

『ヤロブアムは剣で殺される。

イスラエルは、必ず捕らえられて

その土地から連れ去られる。』」

<sup>12</sup>アマツヤはアモスに言った。

「先見者よ、行け。ユダの国へ逃れ、そこで糧を得よ。そこで預言するがよい。」

<sup>13</sup>だが、ベテルでは二度と預言するな。ここは王の聖所、王国の神殿だから。」

<sup>14</sup>アモスは答えてアマツヤに言った。「わたしは預言者ではない。預言者の弟子でもない。わたしは家畜を飼い、いちじく桑を栽培する者だ。」

<sup>15</sup>主は家畜の群れを追っているところから、わたしを取り、『行って、わが民イスラエルに預言せよ』と言われた。

【使徒書日課】使徒言行録 13章1～12節

<sup>1</sup>アンティオキアでは、そこの教会にバルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、キレネ人のルキオ、領主ヘロデと一緒に育ったマナエン、サウロなど、預言する者や教師たちがいた。<sup>2</sup>彼らが主を礼拝し、断食していると、聖霊が告げた。「さあ、バルナバとサウロをわたしのために選び出さない。わたしが前もって二人に決めておいた仕事に当たらせるために。」<sup>3</sup>そこで、彼らは断食して祈り、二人の上に手を置いて出発させた。

<sup>4</sup>聖霊によって送り出されたバルナバとサウロは、セレウキアに下り、そこからキプロス島に向け船出し、<sup>5</sup>サラミスに着くと、ユダヤ人の諸会堂で神の言葉を告げ知らせた。二人は、ヨハネを助手として連れていた。<sup>6</sup>島全体を巡ってパフォスまで行くと、ユダヤ人の魔術師で、バルイエスという一人の偽預言者に出会った。<sup>7</sup>この男は、地方総督セルギウス・パウルスという賢明な人物と交際していた。総督はバルナバとサウロを招いて、神の言葉を聞こうとした。<sup>8</sup>魔術師エリマ——彼の名前は魔術師という意味である——は二人に対抗して、地方総督をこの信仰から遠ざけようとした。<sup>9</sup>パウロとも呼ばれていたサウロは、聖霊に満たされ、魔術師をにらみつけて、<sup>10</sup>言った。「ああ、あらゆる偽りと欺きに満ちた者、悪魔の子、すべての正義の敵、お前は主のまっすぐな道をどうしてもゆがめようとするのか。<sup>11</sup>今こそ、主の御手はお前の上になる。お前は目が見えなくなって、時が来るまで日の光を見ないだろう。」するとたちまち、魔術師は目がかすんできて、すっかり見えなくなり、歩き回りながら、だれか手を引いてくれる人を探した。<sup>12</sup>総督はこの出来事を見て、主の教えに非常に驚き、信仰に入った。

## 【福音書日課】マルコによる福音書 6章1～13節

1イエスはそこを去って故郷にお帰りになったが、弟子たちも従った。2安息日になったので、イエスは会堂で教え始められた。多くの人々はそれを聞いて、驚いて言った。「この人は、このようなことをどこから得たのだろう。この人が授かった知恵と、その手で行われるこのような奇跡はいったい何か。3この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。姉妹たちは、ここで我々と一緒に住んでいるではないか。」このように、人々はイエスにつまずいた。4イエスは、「預言者が敬われないのは、自分の故郷、親戚や家族の間だけである」と言われた。5そこでは、ごくわずかの病人に手を置いていやされただけで、そのほかは何も奇跡を行うことがおできにならなかった。6そして、人々の不信仰に驚かれた。

それから、イエスは付近の村を巡り歩いてお教えになった。7そして、十二人を呼び寄せ、二人ずつ組にして遣わすことにされた。その際、汚れた霊に対する権能を授け、8旅には杖一本のほか何も持たず、パンも、袋も、また帯の中に金も持たず、9ただ履物は履くように、そして「下着は二枚着てはならない」と命じられた。10また、こうも言われた。「どこでも、ある家に入ったら、その土地から旅立つときまで、その家にとどまりなさい。11しかし、あなたがたを迎え入れず、あなたがたに耳を傾けようともしない所があったら、そこを出ていくとき、彼らへの証しとして足の裏の埃を払い落としなさい。」12十二人は出かけて行って、悔い改めさせるために宣教した。13そして、多くの悪霊を追い出し、油を塗って多くの病人をいやした。

## 「行ってらっしゃい」【こども説教のために】

皆さん、日曜日の教会にお帰りなさい。皆さんは、「神の子」と呼ばれるために、神から「聖霊」を与えられた教会に集められる一人ひとりとされました。神を「天の父」とお呼びする「神の家族」の一員として数えられるようになったのです。

「聖霊降臨節」を迎えてから、教会は、特にこのことをしっかり覚えるようにと、聖書日課によって示され続けています。皆さんを、「神の家族の家」に「お帰りなさい」と迎え、ここから「行ってらっしゃい」と送り出します。皆さんが「行って来ます」と出かけて行き、次にまた「ただいま」と必ず帰ってきてくださることを信じて、わたしたちは互いに「待ち合う」のです。

主イエスは、弟子たちを町や村に送り出されると、彼らが帰って来るのをお待ちくださっていました。使徒たちの教会は、仲間の幾人かを他の土地に送り出すと、帰って来る日まで待ちつづけました。

今日も皆さんを、送り出しましょう。初めて我が子を一人で出かせさせる親のような気持ちで、送り出します。「無事に行って、帰って来ますように」と送り出し、ただ神の御守りに委ねて、祈りつつ帰りをお待ちしましょう。

## 預言者が敬われない！

神学校からの紹介でS神学生が常時、出席奉仕されるようになって、一年が経ちました。今夏は、伝道献身者としての訓練のために、神学校から伝道実習に派遣されます。神学を机上で学ぶだけであれば、教室と図書館で十分ですが、将来、伝道献身者として教会に仕える者となるために、教室から送り出され、神学生自身の属する教会からも送り出されて、迎えてくださるところで立たせていただくことを学ぶのです。伝道献身者として志願する神学生は、皆、この伝道実習を課されます。この伝道実習で、はじめて主日礼拝の説教奉仕を経験する神学生も少なくありません。わたしたちの教会は、今夏、計6週の日曜日を伝道実習に充てていただくために、S神学生を他教会に送り出します。

わたしどもが神学生の時代には、夏期の伝道実習に遣わされる学生たちのために、神学校では「壮行会」が必ず開かれていました。教師方や先輩方が、大抵は主イエスが弟子たちを二人一組にして遣わされたことを伝える御言葉によって、励ましを与えてくれるのです。もっとも、持ち物を「杖一本と履物と下着一枚」とは言われませんでした。あるいは、説教奉仕に不安を覚える神学生に向かって、「そのときには、教えられることを話せばよい。実は、話すのはあなたがたではなく、聖霊なのだ」(マルコ13:11)と、主イエスの御言葉を引用して励まされることもありませんでした。かわりに念を押すようにして言われたのは、「説教奉仕の準備のために必要な資料は、図書館でコピーして、しっかり持っていくように」ということでした。

今日は、昨年の神学校日に神学校からの派遣神学生としてお迎えしたK師の就任式が岡山・B教会で執り行われる、とのお知らせをいただきました。今春神学校を卒業し、すでに4月から着任されていましたが、教団の補教師として准允(任命)されるための手続きなどを経て、三か月経った今日、ようやく就任式を迎えられたのです。ベテランの主任牧師のいらっしゃる教会ですから、伝道師として大いに用いられるでしょう。

前任地教会では、神学生を送り出したり、伝道師を次任地に送り出すとき、いつも、「遣わされた先の教会で失敗したり挫折したら、この教会に帰っていらっしゃい」と言って送り出していました。教会の皆さんにも、「そのときには、黙って迎えてあげてください」とお願いしていました。わたしにも、送り出してくれた教会があります。そこでは、「牧師」として特別扱いされません。「牧師」として被っている仮面や鎧の内側がどんなものであるか、皆知っているからです。けれども、「素のままの自分」を知ってくれているところだからこそ、帰ることができるのです。そこでは、「預言者が敬われない」ことも意味があるのです。主イエスは、そのこともお分かりだったはずです。

## 手を引いて

子どもたちや青年たちのための行事を、今夏も計画しています。子どもたちも青年たちも、定着する者は少ないのですが、少ないなりに彼らのために教会ができる限りの機会を提供したいのです。

子どもたちや青年たちだけでなく、どなたにも当てはまることですが、教会の活動に加わってもらうときに、安直な「成功体験」や「達成感」が目標にならないように、ということを考えています。むしろ、教会の活動に参加することで、たくさんの「失敗体験」を重ねてほしいのです。自分の中の「不完全」で「未達成」なものを隠さず見せながら、それでも受け入れられ、安心して留まっていられる経験をこそ、ここでしていただきたいのです。

特に、最近の若者たちは極度に失敗を恐れて生きている、と言われます。「失敗しない人生」を慎重に選び取るように、周囲から圧を受け続けているというのです。小さな「失敗」でも許されないことのように受けとめて、「生きづらさ」を抱えている若者が少なくない、というのです。

主イエスが弟子たちを集め、導かれたところから始まった「教会」で、弟子たちは、幾度も失敗しました。主イエスの教えと実践の意味を理解し損ね、十字架につけられるために逮捕されたときには、皆、離れて行ってしまいました。それでも、彼らは、主イエスの御名のもとで再び集まり、「教会」として歩み始めたのです。何よりも、失敗し裏切った自分たちのことを、主イエスはお赦しくださっていたということを知ることになったからです。ただ、主イエスの死という献身犠牲は必要でしたが。

アンティオキアの教会から遣わされたバルナバとサウロ(=パウロ)らは、キプロス島伝道で、**地方総督**を信仰に導くなど、目覚ましい成果を上げました。その地で、彼らは、**魔術師エリマ**と出会っています。エリマは、魔術師として地方総督に取り入り、成功していたのです。しかし彼は、聖霊に満たされたサウロを前にして、目が見えなくなりました。彼は、その地で得ていた成功を奪われたのです。**だれか手を引いてくれる人**が必要なようでは、彼は、もはや魔術師として人の手引きをすることはできないでしょう。サウロは、エリマを成功者から失敗者へと引きずりおろしたのです。

けれども、サウロらは、きっとこのエリマに手を差し伸べたでしょう。なぜなら、エリマの姿はサウル自身のかつての姿に他ならなかったからです。サウロもまた、突然何も見えなくなり、人に手を引いてもらわなければならなくなるという経験をしたことのある者だったのです(使徒9章)。

ここに、手を引いてくれる人がいます。手を引いてもらうことを待っている人がいます。ここに帰って来ることができるのです。だから、わたしたちは、互いに送り出すのです、「行ってらっしゃい！」と。